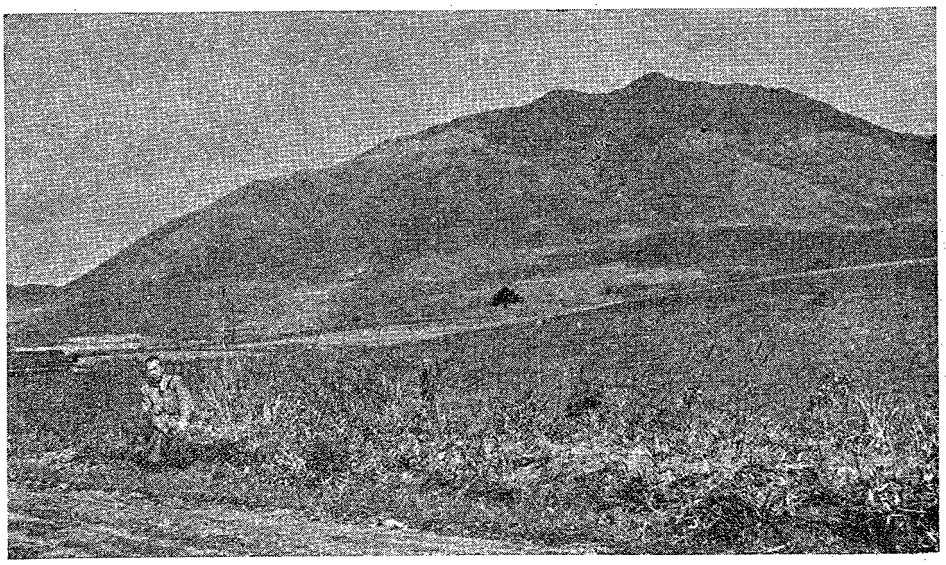
牧草と園藝

昭和33年春季特集号

雪印のたね

夕張郡長沼町字幌内一〇六六
雪印種苗株式会社
中央研究農場



（岡山県蒜山原と筆者）

草と農業

雪印種苗株式会社
専務取締役　五十嵐　清

お芽出たい初春を迎え、多年御支援を願つている全国の皆様の御繁栄を祈ると共に、心から感謝を捧げます。

日本の農民は勤勉の点において世界一流であり、農業技術の優秀なるは米作において、果樹園芸において、乳牛の高能力の発揮において世界的に認められているところである。しかしながら農民一人当りの農業収入において、将又全日本の農業収入においては、洵に貧弱だといわなければならないのを残念に思う。これは勿論、農家が零細経営であること、国土が狭小である事等に原因するが、また一面、名工が手細工に没頭しているような傾きがあるのではなかろうか。米作りは米だけに、果樹園芸家は見事な果実の生産のみに、牛飼いは高記録牛の育成にと、馬車馬的に突進する。この熱心さは大いに賞揚してよい事であるが、更に農業全般の総合生産を高める事に一段と努力すべきである。

水田裏作の草生栽培と酪農、果樹園の草生と小家畜等はそれぞれの生産をあげるのみでなく、土地生産力の維持増強という基本問題を解決する鍵である。

西欧では昔から〝家畜の無いところに農業が無い〟といわれているが、日本においても如何なる農業形態であつても家畜と草の栽培を合理化することこそ健全性を倍加する要素である。これは農民一人あ力に、更に家畜の力と草特有の力を加えて総合力を発揮するからであろう。

私は北海道から九州まで日本航空の旅客機で飛んで、山の多い事を眼下に実感し、また八ヶ岳、蒜山、阿蘇、霧島の山麓を踏破して如何に傾斜地の草原の大きいかを見た。決して国土面積は狭くない。狭いというのは国土の一六％の農耕地だけを云々するから狭いのであつて、スイスのように農耕地以外に国土の四〇％の改良草地を作り上げて食糧生産に利用するならば、日本の食糧問題は立派に解決されるのである。スイスはこの草地の改良に約二百年の努力を続けたと聞いているが、日本においても民族の生命線の開拓という大目標を、集約酪農という旗印で展開された事は真に喜ばしい。しかし作業はこれからである。スイスは二百年を要したかも知れないが、機械文明の今日においては二十年か三十年、遠くとも五十年の歳月は要しないであろう。これが開拓にはあらゆる機械力を導入し、各種の草の特性を活用し、それぞれの家畜の力をかりて一団地毎の改良草地を着々と造成して行かねばならない。これらの土地は全国的に瘠地であり酸性が強いといわねばならぬ。開墾したら有機質を多量に施し石灰を加え、最初は瘠地に耐える強い草種を播き、地力の増強に伴なつて良質の草種に置き換えて行く以外に方法はない。これを端的にいえば土地はあつても生産力は乏しい。この生産力を国民の汗と脂で掘り出して行く決心と覚悟が何よりも必要である。

年頭に際して『わが家の総合経営と草』『国土の総合開発と草』とを考え、草の研究とその活用が現在の日本にとつて如何に大切であるかを痛感する次第である。